

生活

✉ seikatsu@asahi.com

あなたの安心

神奈川県伊勢原市の市民グループ「となりのかい」代表の社会福祉士川内潤さん(29)が、介護する35人の男性から聞き取りしたところ、30人近

くがひとりで介護していた。

家事をしたことがない、仕事を辞めただけが増えていく。そんな悩みを人に相談せず自分で解決しようとするのが共通した姿だった。相談しようにも、地域に知り合いがないことも多い。

仕事のように介護に取り組んで、「結果」を求めてしまう傾向もある。仕事を辞めて介護に専念する人は、情熱を介護に向けて空回りしてしまふ。川内さんは言う。「仕事

仕事のように取り組まない

ひとりで介護③

と違って、介護は現状維持がよい結果。男性たちには、今日より明日良くなって欲しいという気持ちが強い。

むしろ介護保険のサービスを利用するなどして、介護から遠ざかる時間がある人はうまく乗り切れるそうだ。

〈介護殺人を食い止める一言を考える〉——1月、川内さんは介護者や施設スタッフを招いて、そんな題名の討論会を開いた。

妻を介護する一人の男性が体験を語った。川崎市宮前区の内田順夫さん(72)。アルツハイマー病を発症した妻の好

子さんを自宅で介護して17年目になる。

夫妻に子どもはいない。内田さんが介護を始めた頃は石油会社に勤務しており、海外

出張もあった。住み込みの家政婦に留守はまかせた。だが妻の暴力が絶えない。「会社が逃げ道だった」退職後、介護に専念したも

内田さん流 介護の信条

- ① 一生懸命遊び、介護する
- ② 明日のことは考えない
- ③ 介護は恩返しと思うべし



(内田順夫さんは、妻の好子さんを17年介護している。川崎市の自宅、川内潤さん提供)

The Asahi Shimbun

の、自らも病気で2回ほど倒れた。その時「一番困るのは妻。自分が健康でいなければいい介護ができない」との信条を持つようになった。

自由になる時間を作ること考えるようになった。絵を描いたり、泳ぎに行ったりしてパワーをつけ、そこで得た力を武器に介護に臨む。

介護生活の終わりは見えないう。一日一日が続けばいいという考え方で生活する。

最後に介護は「恩返し」と思うよう心がける。

「恩返しをしているのに何でいらいらしているんだ」。そう自分にプレキをかけることができるというのだ。